翻訳にあたってのヒント
その 48

色にちなんだいろいろな英語
第 5 回

● Yellow

「黄色、yellow」にはあまり好ましい意味はなく、例えば、yellow belly が「臆病者」、yellow dog が「野良犬」、yellow card が「サッカーで審判が選手に与える警告カード」、果ては the sear and yellow leaf が「老残、老齢」といった意味を持つ。「嫉妬深い、臆病な、卑怯な、裏切り、卑怯、欺瞞、嫉妬、扇情性」といった yellow の持つ一連のネガティブな意味の源をたどると、キリストを裏切ったユダが着ていた衣服の色にゆきつくと思われる。かつて、ユダヤ人がこの色を身につけることを強制されたり、犯罪者が玄関にこの色を塗らされたりしたという歴史もある。さらに、モンゴロイドの肌色から、黄色人種に対する蔑視の含意が持たれた歴史もあるという。これにちなんだ黄色人種による侵略を恐れての yellow peril「黄禍」と呼ばれる語は、13〜14 世紀の元（げん）の欧州征服に端を発するという。ただし、こうした黄色の悪いイメージが浸透したのは中世以降とのことであるそうで、元々は「光」を表す印欧語に由来し、かつては「太陽、黄金」や「(実った穀物の色から連想される）豊かさ」を象徴する色とされていたといわれる。さらに、中国の歴史をたどると、黄色は高貴な色として位置付けされ、赤・青・白・黒とともに正五色に含められ、そのうちで最高位の色とされる。

また、黄色はあらゆる色のうちで最も反射率が高く明るく感じられる色でもある。文豪であるとともに色彩学者であったゲーテも、「黄は光に最も近い色である」と黄を賛美し、黄は明るさと光を象徴する色であるとし、「もっと光を」を最後のことばとして没したという経緯もある。この黄の明るいという性質を合理的に利用したためか、日本のJISでも、黄は「注意」を表すと規定されており、例えばyellow alertが第1段階の警戒警報であり、yellow flagが障害物のあることを示す信号旗であったり、その明るさゆえに黒色を背景としてコントラストを生み出し「注意」を喚起する標示に使われていたりする。日本語で「黄色い声」という言葉があるが、英語でこれはa shrill (squeaky) voiceと訳され、yellowは使われない。何故こんな言われ方をするかということに関しては、一説によれば、仏教の『声明（しょうみょう：仏教の儀式・法会で僧が経文を朗唱する声楽)』で、声を高く出す個所に黄色の記号を付けたことに由来するという。さらに、「扇情的な低俗紙」のことを英語ではyellow journalismという（下記参照)。これに絡んで日本語にも「黄表紙（きびょうし＝江戸後期、黒本・青本に次いで安永（1772-1781）頃から文化年間（1804-1818）の初期まで江戸で流行した黄色い表紙の絵本の称)」というのがあるが、この黄には低劣の意はほとんどない。

◆　いろいろな黄系色の英語：　cream, mimosa, lemon yellow, yellow green, etc.

◆　黄系色の英語表現例：

▼　He is too yellow-bellied to make a speech in front of a lot of people. 彼は気が小さい男だから、皆の前でスピーチなどさせないことだ。

▼　He's just a yellow-bellied old fool.　彼は単に臆病で老いぼれのばかな奴さ。

▼　That newspaper is yellow journalism at its worst.　あの新聞は醜聞などを興味本位で書く低俗新聞だ。

■　yellow-belly　憶病者

■　yellow dog　いやしむべき人物、下劣な人物、密告者、裏切り者、労働組合に入らない従業員・非組合員

■　yellow cab　（西洋人男性にだまされやすい・西洋人男性に過剰な憧れを抱く）日本人女性

以上、48 回目は「黄色、yellow」の話でした。